

乳苗稲作シンポジウム「乳苗への挑戦」に参加して

東京大学農学部 森田茂紀

1994年12月6日、岡山県岡山市の岡山農業会館において乳苗稲作シンポジウム「乳苗への挑戦」が開催された。これは、全国農業共同組合連合会（JA全農）の主催、農林水産省、日本農業新聞の後援、農業機械・育苗マット・関連機器各社の協賛によるものである。なお、11月30日には宮城県仙台市において東日本ブロックのシンポジウムが開催されており、これを受けて西日本ブロックのシンポジウムとして開催されたものである。

開会式の後、まず、高知大学農学部教授の山本由徳氏が「乳苗の育苗と特性」と題する基調講演を行なった。ここではご自身でのご研究をもとに、乳苗を葉齢1.8-2.5、苗丈7-8cmで、胚乳が35%以上(約50%)残存しているものとし、緑化苗が望ましいと結論した。このような乳苗は、植傷みが小さく、活着がスムーズで初期生育がよく、深植え・冠水耐性が大きいいため早植えが可能であり、分けつの出現位置が低いいため疎植が可能で、穂数が増加する特性を有しているということである。

昼食後は、JA広島大和の貞宗幸生氏が「乳苗の本田管理（施肥・防除・水管理）について」と題して、誰でも容易に取り組み、安定収量が確保できることを基本にした移植およびその後の本田管理について、ここ数年の経験を講演された。引き続き、香川県三木町の井戸俊博氏および島根県大東町の児玉朝市氏が、乳苗稲作の実践事例について報告された。

その後、農業研究センターの梅本雅氏が、「低コスト稲作としての乳苗稲作について」と題し、コストダウンの限界としての移植前作業の省力化という問題点を指摘し、技術的な安定性が高く、確実に低コスト化が可能な技術としての乳苗の経営上の特徴に重点をおいた講演をされた。

最後に、農業生産工学研究会の姫田正美氏が司会をされて、総合討議が行なわれた。

農家などの現場に近い方々を中心に300人以上の参加があり、活発な意見交換が行なわれ。その中で、本田での乳苗の根の活力が稚苗より高く感じられるという指摘があり、興味深かった。